

みごとな幕切れ

戸板康二



みごとな幕切れ

戸板康二



江苏工业学院图书馆
藏书章

三月書房

みごとな幕切れ

一九九〇年八月一五日発行

著者 戸板康二

発行者 吉川志都子

発行所 三月書房

〒101 東京都千代田区神田錦町三一―四

錦町ビル202

電話・FAX 〇三―二九一―三〇九一

振替 東京一―五三二二五

印刷 壮光舎印刷株式会社

製本 松栄堂製本所

目次

I

みごとな幕切れ

9

十五代目市村羽左衛門 初代中村吉右衛門
六代目尾上菊五郎 二代目市川松蔦 七代
目市川中車 五代目中村歌右衛門 七代目
松本幸四郎 七代目坂東三津五郎 二代目
市川左團次 六代目尾上梅幸 十一代目市
川團十郎 三代目中村梅玉

回想・新派十二人

38

花柳章太郎 大矢市次郎 市川翠扇 花柳
喜章 水谷八重子 小堀 誠 喜多村緑郎
柳永二郎 英 太郎 伊志井 寛 河合武
雄 井上正夫

昭和歌舞伎前半期

云い立ての芝居

「なよたけ」と私

II

宇野重吉の死

中村勘三郎を悼む

中村勘三郎の芸

なつかしい松緑の笑顔

尾上松緑の芸

辰巳柳太郎をしのぶ

武智さんの人と仕事

半世紀の知遇・山本健吉さん

123 117 115 107 104 97 94 91 85 80 68

安住敦さんの人柄

126

III

都あるき

131

古都の闇

136

わが山水鳥話

140

桂林のらく書き

150

郷愁の歌

152

諸国の菓子

156

食味評論家

160

今日も無事だった

163

踊る顔

165

見所で会った人々

167

久保田万太郎先生の酒

季題を用いた題名

探している本

奥の細道の一句

能村登四郎さんの一句

贈答句のたのしみ

私の三短編

大正初年のポスター

快食快眠快便

後記

189 187 185 184 182 180 178 176 173 169

みごとな幕切れ

装幀 福井三知

みごとに幕切れ

1 十五代目市村羽左衛門

昭和十六年一月の歌舞伎座に、『鞍馬山のだんまり』が上演された。

この月、十五代目羽左衛門は、十二代目仁左衛門の子の片岡義直を養子にして、又三郎という芸名を与えた。今の吉五郎であるが、三宅周太郎さんの「俳優対談記」を見ると、この少年の心持（胸を指して）がいいということで、自分の子にしようとしたと、羽左衛門は説明している。

その縁組と改名の披露狂言のこの『だんまり』の、羽左衛門の幕外の六法が、何とも華やかで、かつ瀟洒なものだった。

私は時代だんまりで、もう一人、昭和九年の戌年の正月、中座の『八犬伝』で、初代鴈治郎の犬山道節を見た印象は、忘れられない。

道頓堀に明治以来君臨した王者の貫禄が、充実しきった姿で、両手を花道の七三で左右にひろげた見得の立派さは、観客を圧倒した。

羽左衛門のは、それとはちがって、まことにいきな六法とでもいおうか。

この役者は、見得をする時の、目の使い方が美しいので、世話のだんまりで、『め組の喧嘩』の八つ山下の辰五郎の引っこみもそうだったが、揚幕にはいったあとの余情が残っていて、客席をサッと立って廊下へ急ぐ人がすくなかった。

羽左衛門の「みごとな幕切れ」をまだ二三挙げると、『布引滝』の実盛の馬に乗り、身体を反らした姿も、目にあざやかに残っている。

晩年、戦時下でも、羽左衛門はたびたび実盛を演じたが、世話物の与三郎とともに会心の役でもあり、また「五世菊五郎自伝」では、家橋時代、この役を初演した時、五代目から、こまかく教えられたのが、菊五郎自身の談話として、伊坂梅雪に筆録されているのだ。

二つ目の幕切れでは、『石切梶原』の引っ込みであるが、実盛同様、白塗りの生締の役で、この場合は、六郎太夫の娘の梢がからむので、別の情感があふれていたと思う。

役を切ったあと、肩衣を梢に介添されて着るところで、若い女形を一種独特の流し目で見ると、梢の役者は、ゾクゾクしたそうだ。

もうひとつは、『お祭佐七』の待合の塀外で、伴平という武士に帯をとかれて、じゅばんのまま逃げ出して来た小糸に、自分の着て来た羽織を着せ、手をひいてゆこうとする。伴平という名の通り、これは伴内のパロディで、つまり佐七と小糸は、道行の勘平とおかるのつもりなのだ。第一、序幕の鎌倉河岸の祭礼の場に、その道行の男女を子供が演じた「地走り」を見せておくと

いった洒落れた趣向が用意されているわけだ。

役をはなれて、口上の時、舞台の中央にいる羽左衛門が「隅から隅までズーイと」と場内を見まわす鋭い目と朗々たるせりふは、座長らしい、さわやかなものだったのを忘れない。

このように、いい幕切れを、羽左衛門では数多く見ているのだが、ここではだんまりの金糸四天の引っこみを、あえて挙げておくことにする。

これから、あと十一人の役者の「みごとな幕切れ」について毎月書くことにするが、私は明治の團・菊を知るよしもない世代ではあっても、やはりめぐまれた観劇歴を持っていると、しみじみ思わずにはいられない。

2 初代中村吉右衛門

初代吉右衛門は、母親が九代目團十郎を大変尊敬していたので、その影響で團十郎系の役を、若い時から演じようとしていたらしい。

そして、その中でも、加藤清正は好きであった。

白鷗が戦後をはじめて劇団と北海道にゆく時、吉右衛門は飛行機がこわいといったが、一時間ちよつとでゆけるのだからとすすめ、納得させたが、羽田から札幌に着くまで、「南無妙法蓮華經」とお題目を口の中でくり返したという。清正になったような気持だったのであろう。

清正は、團十郎の演じた『地震加藤』も、毒まんじゅうの清正といわれる『誠忠録』も、私は

見ているが、あのひげがよく似合っていた。そして、自分のために、吉田絃二郎に依頼して、『二条城の清正』『熊本城の清正』『蔚山城の清正』の三部作を書いてもらった。実業家の木村久寿弥太氏から清正役のために名刀をもらって、大喜びだった。

三部作のうち、『二条城』だけは好評のため再演もしたが、その初演の秀頼がいまの勘三郎（当時もしほ）で、いいものだった。この時は、二代目左團次の家康であった。

その勘三郎がやがて清正をし、現代では、孫の幸四郎が清正、曾孫の染五郎が秀頼をするのだから、これはすでに、播磨屋系のいえの芸となったといえる。

しかし、もうひとつ、古典で『八陣守護城』はちしんしゅごのほんじょうというものがあり、これは毒酒を盛られる場面があるので『毒酒の清正』と俗称される。毒酒の場面は今はないが、御座船と熊本城の場面は、今でもたまに上演される。しかしおもしろいことに、前の場は、まったく純古典の演出、後半は活歴風な演出になっていて、これは、九代目團十郎の工夫らしいが、病気でひきこもって、天命を待っている清正の背後の襖に、大きな芭蕉の葉を描き、それを光背に見せて、妙見菩薩の形をして幕になるのである。

御座船というのは、自分の居城に帰る正清の船に、鞆川玄蕃という武士が、正清の身体の状態を見に来て、元気でいるのを知り「ハテ面妖な」といって小舟で去る。

正清は朱塗りの船の上で、嫁の雛衣の弾じる琴を聞いているが、にわかに吐血を催し、船首のほうに歩いてゆく。雛衣が舅を案じて、「しゅうと御様の、お顔の色が」というと、それを紛ら

すように、「船頭ども、清めの舟唄うたへうたへ」と命じ、その唄を聞きつつ、よろめいて太刀を床にトンと突き、懷紙に血を吐くのを嫁に見せまいとして、「ハテうらかな眺めじゃなア」という。

この船がぐるりとまわってから、この幕切れまでの約五分間は、何とも見事な古典劇の様式美の極致であった。

しし皮のかつらに、赤い顔に隈をすこしとって、衣裳は、黒のびろうどの着付に、金の織物の上下というのだから、まさに錦絵のようだった。（戦後、晩年の二代目延若が大阪で、この御座船だけ演じたという）

吉右衛門の幕切れとしては、やはり大きな船を使った『毛剃』の元船のいわゆる汐見の見得、『俊寛』の岩の上の姿、そして映画にもなった『熊谷陣屋』の花道と、まだいいものはいろいろあるが、昭和八年二月の明治座で見た正清の幕切れは、まさに忘れじの舞台だった。

3 六代目尾上菊五郎

六代目菊五郎の幕切れでは、木村伊兵衛写真集所載の『娘道成寺』『鏡獅子』をもちろん、髻髯と思ひ出す。

しかし、私の記憶の中では、新歌舞伎の脚本の役が、まず浮ぶのである。

『坂崎出羽守』の二幕目、桑名の渡ししの船の幕切れがそれだ。大坂落城の日、火傷を顔に負った

出羽守が、いのちがけで救った千姫が本多平八郎と仲よく海を見ているうしろ姿を見、たまりかねて船底にかけこむ姿は形容しがたい悲劇を創造した。しかし、この写真は残っていない。

また『一本刀土俵入』の最後で、お薦を見送っての独白、『暗闇の丑松』でお米の敵を討って湯屋の裏から脱け出し、花道をはいる、悲壮な退場、以上、山本有三や長谷川伸という作者が、自分の考えた以上のものを、見せてもらったと、それぞれ書いているのだ。

これらはさておき、六代目は私の見たいいくつかの丸本物でも、新しい演出を見せてくれた。『吃又』『五斗』『野崎村』などが、それである。

『野崎村』のお光では、尼になって恋しい久松とお染が、駕と船に別れて大坂へ帰る。

このけなげな女が土手で足をすべらせる久作を支えて見送るというのが、従来の型だったのを、六代目は、見送ったあと、せきを切ったような悲しみにとらわれ、立ち身の久作の膝にすがり、うしろ姿で泣き崩れることにしたのだ。人間として、そうせずには、いられなかったのだと思う。いま、ここに挙げる『堀川』も、ほかの役者とは、ちがう与次郎であった。

この芝居は、お俊という遊女の実家の貧しさを描いている点で、きわめて現実性がある。しかも、母親は盲人である。着飾った廓の女が、薄汚い畳の上にしょんぼりすわっている姿は哀れだが、一般の演り方は、与次郎を無筆で、多少知能的にも低く演じる傾向があった。しかし山城少掾の浄瑠璃を聞いていると、与次郎は「阿呆」ではない。誠実な若者である。

河原で人を殺した伝兵衛が訪ねて来る前に、母親と兄に、伝兵衛との間柄を、深い仲ではない